

# 薩摩藩と幕末・明治維新

## 1. Cangoxina

NHK大河ドラマ「西郷どん」。第1話から16世紀の地図に書かれた「Cangoxina」がキーワードに使われている。19世紀が舞台の「西郷どん」になぜこれが使われているのか。それは16世紀も19世紀も、鹿児島が南の玄関口、特にヨーロッパの関係において重要な所だったからである。

16世紀、ヨーロッパは大航海時代、ポルトガル・スペイン人たちが世界各地へ進出していった。その進出コースは大西洋を南下してアフリカ大陸を周り、アラビア・インドへと進出してきた。そして東南アジアから北上し、中国へ、中国南部から琉球・奄美の島々に北上して日本へ到達した。

19世紀、イギリス・フランスが植民地を求めてアジアに進出してきた。その進出コースは16世紀のポルトガル人たちとほぼ同じであったため、16世紀に鉄砲伝来・キリスト教伝来などの舞台が南九州だったように、19世紀の通商を迫る西欧列強との出会いの舞台も日本の南端に位置する薩摩藩領となった。

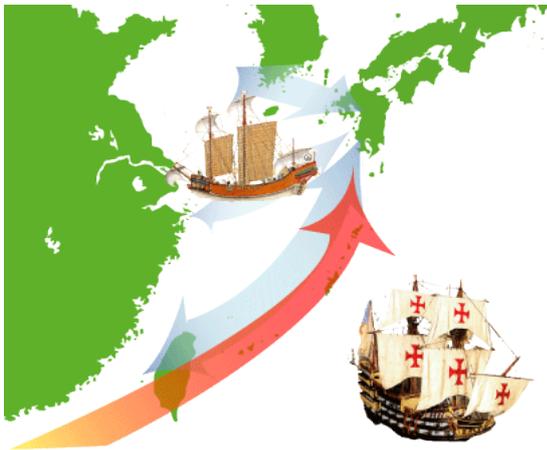
薩摩藩は他地域より早く通商を迫る西欧列強の激しい外圧にさらされ、このままでは日本が植民地化されると危機感を抱き、それを阻止するために動き出す。その動きの中に島津斉彬や西郷隆盛らはいた。



メルカトルアジア図

1587年（神戸市立博物館蔵）

日本の位置がやっと分かった段階の地図。日本の南端に「Cangoxina」とある。



16世紀 ポルトガル人たちの進出コース



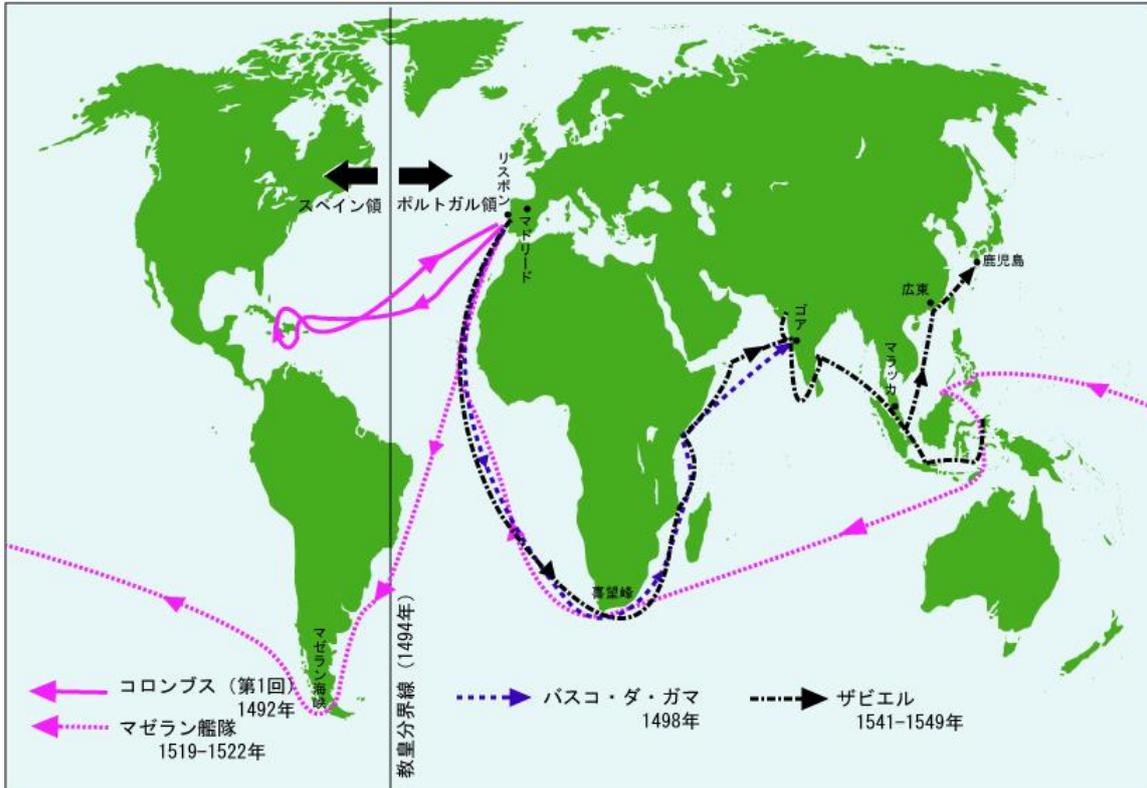
19世紀 イギリス・フランスの進出コース

## 2. 海の道

南九州からトカラや奄美・琉球等の島々を経由して中国大陸へと至る海上交易路は、一般に「海上の道」「海の道」と呼ばれている。この「海上の道」は、北部九州から壱岐・対馬などを経て中国・朝鮮へと伸びた海上交易路と共に、日本と大陸とを結ぶ重要な役割を担い続けてきた。



一足先にアジアに到達したポルトガルは、1517-1522 年にかけて明と接触し国交を結ぼうとしたが、冊封体制を維持しようとする明はこれを受け入れなかった。このためポルトガル人たちは密貿易に転じ、倭寇とも接触するようになった。その結果、ポルトガル人たちが海上の道を伝って日本に迫り、種子島へ漂着、西欧人による日本発見となった。南九州の湊々は、ヨーロッパ人たちにとって文字通り日本の玄関口となり、1549 年にはザビエルが鹿児島を目指して船出し、鹿児島にキリスト教が伝わったのである



【史料2 1549年11月5日付 ザビエル書翰 ゴアのイエズス会宛】

- 12 (略) 私たちが交際することによって知りえた限りでは、この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びとも、貧しいことを不名誉とは思っていません。(略)
- 20 (略) この島、日本は、聖なる信仰を大きく広めるためにきわめてよく整えられた国です。そしてもし私たちが日本語を話すことができれば、多くの人びとが信者になることは疑いありません。主なる神は私たちが短い期間に〔日本語を〕覚えるならば、きっとお喜びくださるでしょう。私たちはすでに日本語が好きになりはじめ、四〇日間で神の十戒を説明できるくらいは覚えました。(略)

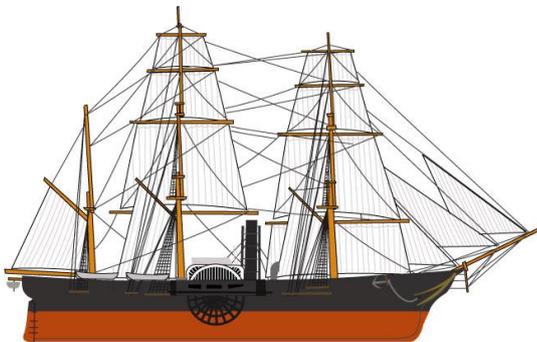
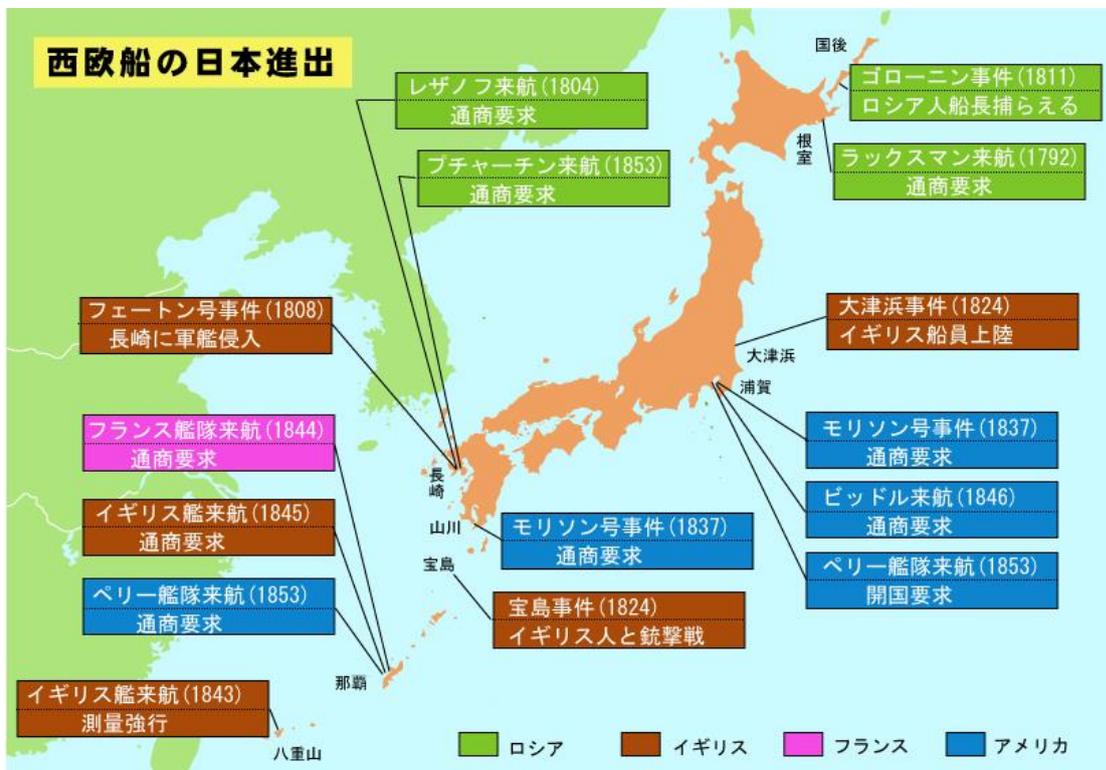
(河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』 平凡社「東洋文庫」581)

※約2年間日本に滞在したザビエルは、その前半、約1年間を鹿児島で過ごした。上の史料は来日3ヶ月目に鹿児島から書き送ったもの。まだ鹿児島以外のどこにも行っておらず、日本＝鹿児島という状況である。ザビエルが絶賛した日本人とは鹿児島の人たち。好きになった日本語は鹿児島弁。

#### 4. 西欧列強の進出と島津斉彬

薩摩藩領の近海では、18世紀末頃から西欧諸国の艦船が出没しはじめ緊張が高まっていった。

1840年には、アヘン戦争がはじまり、アジア最大最強の清国（中国）が西欧の島国イギリスに完敗し、1842年に香港割譲などを認めた南京条約を押しつけられ、植民地化の道を歩み始めた。その情報は日本へも伝えられ植民地化の危機が認識されるようになったが、薩摩藩ではそれが現実問題として降りかかってきた。まずアヘン戦争が終わった翌年、琉球の宮古・八重山にイギリスの測量艦が姿を現し、琉球王府の制止を無視して測量を強行していった。さらに翌弘化元年（1844）フランス軍艦アルクメヌ、弘化2年イギリス測量艦サラマング、同3年フランスのイシンドシナ艦隊（クレオパトラ他）というように、毎年のようにイギリス・フランスの軍艦が琉球に来航して通商を求め、薩摩藩・琉球王府はその対応に追われ、西欧の科学技術を導入して軍備の近代化・強化を図った。



#### サスケハナ

木造フリゲート、1850年完成、  
2,450bm<sup>ト</sup> (排水量 3,824ト) 水線長 76<sup>メートル</sup>、  
蒸気機関 (推定馬力 420Hp)、  
速力 8ノット (約 15キロ)、  
大砲 9門

#### 将軍御座船「天地丸」

(ペリール来航時日本最強クラスの軍船)  
関船、寛永7年(1630)建造。500石 (約 75ト) 積。  
全長約 34<sup>メートル</sup>。小櫓 76挺立・1 反帆。



嘉永4年(1851)薩摩藩主に就任した島津斉彬は、集成館事業を興して近代化の動きを加速させると共に、幕府や藩という枠を越えて、日本が丸丸となってイギリスやフランスなどの国々に対処すべきと主張し、その実現に向けて公武合体(朝廷・幕府・大名らによる挙国一致体制)を推進し、中核となる幕府を強化するため將軍継嗣問題では、血筋より能力を重視して一橋慶喜を押しした。西郷は斉彬の手足となって行動し、安政5年(1858)に斉彬が死んだ後も、斉彬の遺志を受け継ぎその実現を目指した。



集成館 (佐賀県武雄市蔵)

#### 【幕末期、外圧に対する対応】

- 大部分の日本人 → 外国人は打ち払うべきと考えた(攘夷)。また世界情勢にも疎く、幕府や藩レベルを国家と認識しており、イギリスやフランスを薩摩藩などと同列にみなし、攘夷が可能だと思っていた。
- 進歩的な大名等 → 西欧列強の軍事力に脅威を抱き、西欧の科学技術を導入して軍備の近代化に努めた。
- 島津斉彬 → 軍事面だけでなく民需・社会基盤整備など幅広い分野に及んで近代化に取り組んだ。また幕府や藩といった枠ではなく、日本がまとまって行動すべきだと主張した。攘夷論に対し、「無謀の大和たましいの議論」と一蹴、むしろ諸外国と交易すべきと考えていた。「第一人の和、継て諸御手当」と、まず人の和を作るため、産業を興し、社会基盤を整備して豊かな暮らしを保障すべきと訴えた。そして侵略されないよう軍備を調えるようにすべきと考えていた。

#### 【史料3 安政5年(1858)5月28日付 島津斉彬建白書 (『斉彬公史料』)】

当時(現在)外寇攻守の具は第一に大砲・砲台あるいは堅牢の軍艦など十分にこれなく候ては、夷狄(外国人の蔑称)とは申しながら当時戦闘に取り馴れ戎器(兵器)を巧制にいたし、航海などにも熟練の者どもごご候えば、御必勝の算いかかこれあるべきや(略)第一に人の和、継いで諸御手当を精実にし残すところなく御行き届きこれなく候ては、皇国の御守護の御奉職を整えなされがたき世態にごご候(略)富国強兵の基を植しなされ、上下一同嘗胆(がまん)の憶を成し、外寇制御(侵略を防ぐ)の設十分に整えられたく(以下略)

※斉彬が幕府に出した建白書。西欧列強との軍事力の差は歴然としており、戦っても勝ち目がないと記している。また軍備の強化だけでは日本は守れず、富国強兵策で産業を興し、社会基盤を整備して人々に豊かな暮らしを保障し、人の和を生み出すべきと主張している。人の和が日本を守る城となるというのが斉彬の考えであった。

#### 【史料4 市来四郎『斉彬公御言行録』「水戸侯・越前侯ノ御話」】

今の世となりては、日本一致一体の兵備にあらざれば、外国に対当することかなうまじく、公議も諸大名もこれまで一国一郡くらの心得にては、日本国の守護は調うまじく

※江戸時代、幕府や藩はそれぞれが独立した行政組織・軍隊を持つ国家であった。斉彬はその壁を打ち破り日本が一丸となって行動しなければ植民地化を免れることはできないと考えていた。

#### 4. 斉彬の遺志継承

島津斉彬は安政5年（1858）に急死した。西欧列強から植民地化されないように挙国一致体制を築き、強く豊かな国造りを目指すという斉彬の考えは、弟の島津久光、西郷隆盛・大久保利通らに受け継がれた。

薩摩藩の実権を握った島津久光は、文久2年（1862）兄斉彬の遺志を実現させるため上京、勅使と共に江戸に下り幕府に改革を迫り、安政の大獄で失脚した徳川慶喜等を復権させた。

文久3年、薩摩藩は会津藩と手を組み、過激な攘夷の実行を目指す公家・長州藩士を京都から追放した。そして公武合体派による参与会議が開催されることになった。しかし、元治元年（1864）久光や元越前藩主松平春嶽、元宇和島藩主伊達宗城らと一橋慶喜が対立し、参与会議は崩壊した。これ以後、久光等は慶喜と距離を置くようになった。

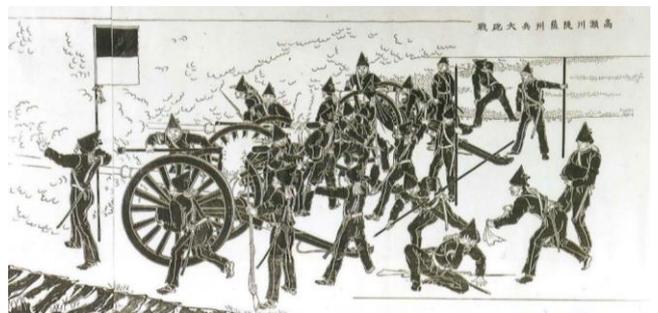
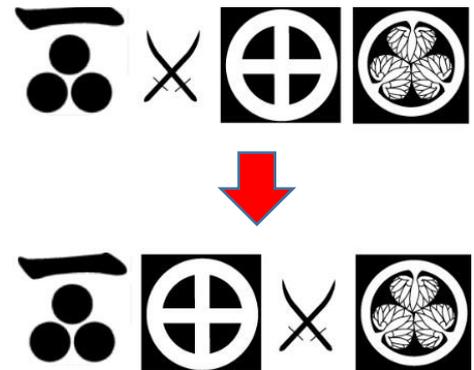


禁門の変図屏風（若松城天守閣郷土博物館蔵）

元治元年7月19日（1864年8月20日）、前年の八月十八日の政変で京都を追われた長州藩が、汚名挽回・勢力回復のため京都に攻め寄せた。これを幕府・会津・薩摩藩などが撃破した。さらに翌、元治元年8月、イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四ヶ国艦隊が長州藩を攻撃、砲台等を占領した。この敗戦により長州藩は諸外国から攘夷放棄を迫られ、これを受け入れた。

薩摩藩にとって、幕府は挙国一致体制を構築するのに邪魔な存在、排除すべきものへと変化した。逆に攘夷論を放棄した長州藩と戦う必要性はなくなった。薩摩藩はその長州藩と手を組み、明治維新を断行し、日本を近代国家へ生まれ変わらせたのである。

ただ、それは武士の世を終わらせることでもあった。このため、勝者の武士は不満を抱きがちで、不満を募らせた長州・佐賀・薩摩などの武士たちが次々と新政府に反旗を翻すことになるのである。



戊辰戦争絵巻（黎明館寄託）